

研修並びに行政視察報告

(会派 誠和クラブ)

《視察日程》

研修・視察 月 日	研修・視察先	研修・視察施設	研修・視察内容
6月 25日 (水)	秋田県由利本荘市	鳥海山木のおもちゃ館	廃校の利活用、木のおもちゃ館について
6月 26日 (木)	秋田県大仙市	大仙市健康福祉会館	まちなかへの都市機能の集約と地元商店主の新たなチャレンジによる賑わいづくりについて
	秋田県にかほ市商工会	にかほ市商工会	にかほ市商工会による出前商店街について
6月 27日 (金)	秋田県能代市	マルヒコビルディング	木都再興プロジェクト「マルヒコビルディング」について

《視察内容》

1. 秋田県由利本荘市 人口 69,592 人、面積 1,209.59 km²

●視察目的

廃校を活用した地域活性化の取り組み、特に、木のおもちゃ館での木育施策を調査研究し、安来市が現在取り組んでいる小中学校適正配置によって生じる廃校舎の利活用の参考とするため。

●説明者 由利本荘市教育委員会、観光文化スポーツ部文化・スポーツ課職員、鳥海山木のおもちゃ館職員

●説明概要 鳥海山木のおもちゃ館と木育について

平成26年4月～11月「地域を支える人材育成塾」で市でも豊富な資源である「木」を活用した事業ができないか！と考えたのが発端。

平成26年12月、由利本荘市木育推進事業庁内検討会議の設置。様々な部署から24名、市としての方向性など確認。

平成27年1月、国登録文化財「旧鮎川小学校」を活用し「木のおもちゃ館」に整備できないか検討開始。

平成27年10月、第1回木育キャラバンの開催、2日間で約3千人。平成28年5月、第1回木のおもちゃ製作講習会の開催、市民（職人等）31名参加。

平成28年6月、議会6月定例会一般質問答弁で「木育推進の市」を宣言。7月、「木のおもちゃ館」整備基本構想等業務委託に着手。

平成 29 年 8 月、木のおもちゃ美術館整備事業に着手。平成 30 年 6 月 30 日、鳥海山木のおもちゃ美術館竣工、7 月 1 日グランドオープン（1,033 人）。

令和 6 年 5 月 4 日、来館者 30 万人達成セレモニー。



●考 察

・作野幸憲

由利本荘市は面積（1210 km²）の約 75%（894 km²）が森林面積で、平成 26 年に「地域を支える人材育成塾」で、豊富な資源である「木」を活用したことができないか？が発端で事業が始まったそうです。

事業では木材資源を暮らしの空間にということで、机やいす、木のおもちゃとして製品化すること、また地域木材産業の活性化につなげていくため木工職人の育成、働く場の創出を図っておられました。

そしてその一環として、子どもが屋内で遊べる場が必要ということで木育事業が始まり、国の登録有形文化財の廃校舎（旧鮎川小学校）を活用できなかいか？という検討が始まったとのことでした。絶余曲折があったものの平成 30 年に「鳥海山木のおもちゃ美術館」としてオープン。現在は「おもちゃ館」として累計約 34 万人の入館者を迎えておられ、昔懐かし木造建築のぬくもりと唯一無二の国登録有形文化財のおもちゃ館として全国に認知されています。

林業は大きな可能性を秘めた産業なので、安来市も川上だけではなく、川中・川下をどうしていくか真剣に考えなくてはなりませんし、現在進行中の「林業人材育成拠点整備事業」についても再検討する必要があると考えます。

・三島静夫

木材の活用と子どもの遊び場づくりの二つの目的から、木育事業として廃校を活用した取り組みをおこなっておられる現状を視察した。

活用された廃校は、国登録の有形文化財であり学校 자체が木造であり趣のあるところではあるが、活用方法が多岐にわたり安来市においても参考にすべきところが多かった。

特に、体育館を市産材を利用して森林フィールドアスレチックの様な室内公園をつくつておられたのには感動を受けた。

安来市においては学校適正配置が進み空き校舎の活用が求められるが、校舎に関しての活用は様々なものが考えられるが、体育館に関しては、この度の「旧鮎川小学校」のような市産材を利用したプチテーマパークに改造する。空き体育館は地域ごとに若干の特徴を加えることで、市外からの利用者が増え交流人口の増加に繋がるのではないかと思った。

管理に関しては、交流センターを移管することで解決するのではないかと考える。

・清水保生

木育に関し、東京おもちゃ美術館を視察され、由利本荘市でも木育事業ができると確信された。当初は木のおもちゃ美術館としてオープンされたが、民間事業者の東京おもちゃ美術館とは、施設の運営方針等で意見の相違が生じ、2年で美術館の名称を廃し、おもちゃ館として再スタートされた。

旧鮎川小学校は昭和28年～29年の2か年で整備された木造平屋建て $2,419\text{ m}^2$ の国登録有形文化財（平成24年2月認可）であり、昭和45年までは鮎川中学校として使用されていた。

この木造校舎を活用したこと、木の遊具やおもちゃ遊びの空間だけない、昔懐かしい木造校舎の雰囲気も、入館者の満足度が高くなっている要因であり、唯一無二な「国登録有形文化財の鳥海山木のおもちゃ館として全国的にも素晴らしい施設として認知されている。

令和2年10月には、隣接したあゆの森公園（ $4,300\text{ m}^2$ ）もオープンした。また、市産材を活用した木工製品の開発・活用もされている。その他、ソフト事業として、もくいく体験塾の開催もされている。

安来市でも現在小中学校の再編が検討されているが、その結果として生ずる廃校舎等の利活用に大いに参考となる事例であった。

2. 秋田県大仙市 人口 71,709 人、面積 866.79 km^2

●視察目的

大仙市都市計画マスタープランによる、機能集約型都市構造への転換、特に大曲駅周辺

を「中心拠点」とした市街地再生の取り組みを調査研究し、安来市の市街地活性化施策の参考とするため。

●説明者 大仙市経済産業部商工業・若者チャレンジ振興課、建設部都市管理課、企画部総合政策課職員

●説明概要 医療・福祉・交通等の都市機能集積による人口減少社会に対応した住みよいまちづくりについて

平成21年7月、都市計画マスタープランの策定。

目標とする将来都市像は、人が生き人が集う夢のある田園交流都市。都市づくりの4つの方向性は、①市町村合併を契機とした一体的な都市づくり、②資源を活かした都市づくり、③新たな時代に対応した持続可能な都市づくり、④市民との協働による都市づくり。

大曲駅周辺を「中心拠点」として再生、特に駅西地区は、住宅、商店街、医療施設、学校などの既存ストックがまとまりよく配置されており、自動車に過度に依存しない歩いて暮らせる生活街として再生を図る。

●大仙市中心市街地活性化基本計画の事業概要

【多くの人が訪れる医療・福祉機能等が充実したまち】

① 医療・福祉の拠点整備

大曲通町の大型小売店舗が閉鎖した跡地に総合病院、高齢者福祉施設及び複合商業施設を新たに整備し、中心市街地の再生を図る。

② 福祉・健康施設の整備

大曲通町の仙北組合総合病院移転跡地に健康増進センター、児童福祉施設を新たに整備し、中心市街地の再生を図る。

③ 魅力的な商業機能の構築

花火通り商店街の空き店舗を活用した交流施設等に、医療機関の受信待機情報や商店街情報を表示する情報モニターを設置（まちなか待合室）し、医療機関と既存商店街との結び付きを強化し、商業の活性化を図る。

【多くの人が活き活きと交流・活動できるまち】

④ 高次都市施設整備事業

人々の交流・活動を促進させるための高次都市施設として、新たに地域交流センターを整備し、地域コミュニティの再構築を図る。

⑤ 中心市街地にぎわい創出事業

花火通り商店街に立地する「花火庵」と「ペアーレ大仙」は市民講座や商店街のイベント、ボランティア団体の活動の場として利用しているが、更なるニーズに応えるため取

組の充実を図り利用者を増加する。

* 北街区

棟名	病院棟	複合商業棟	高齢者福祉棟	バス待合棟
施設名	大曲厚生医療センター	Anbee 大曲	ショートステイ やすらぎ	大曲バスターイン
延床面積 (m ²)	34,122.99	1,695.93	2,287.17	544.00
構造	S + R C	S	R C	S
階数	8階 (B1階)	2階	4階	1階
高さ (m)	41.15	9.65	15.65	7.85

* 南街区

棟名	事務所棟	健康福祉棟	児童福祉棟	駐車場棟
施設名	大曲商工会議所	大仙市健康福祉会館	大曲駅前こども園	大曲ヒカリオ駐車場
延床面積 (m ²)	1,195.43	2,701.27	2,182.87	5,211.95
構造	S	S	S + W	S
階数	2階	3階	2階	4階
高さ (m)	11.20	16.30	10.30	14.01



● 考察,

- ・作野幸憲

大仙市大曲地区では、人口減少や郊外化による中心市街地の空洞化が課題となっていて、それを解決するため、①地域中核病院や認定こども園を駅前に集約（医療・子育て支援施設

を中心市街地に配置し、日常的な人の流れを創出) ②歴史的建築物のリノベーション(商店街の古い内蔵を改修し、交流拠点「毎日大曲」として再生)をして、都市機能の集約をされました。

また地元商店主の新たなチャレンジとして、商店街の役割を「週末の余暇の場」から「日常使い+観光拠点」へと再定義し、地域ブランド「毎日大曲」の開発や、商店街の魅力を伝える「364 マップ」を作成するなど情報発信と人材育成にも力を入れて事業を進めておられました。

成果としては、①毎年3~4件の新規出店が続き、若者や市外からの来街者が増加していること②商店街の非組合員との連携が進み、地域全体での賑わいづくりへと結びついてきていることなどだということでした。

今回視察した大仙市の取り組みは、都市機能の再配置と地域資源の活用を組み合わせた「持続可能なまちづくり」のとても良い事例でした。

・三島静夫

大仙市では旧中心市街地の人口空洞化、高齢化に対応するために、これまで商店街であった駅前を、歩いて暮らせる生活街として再生することを目的に医療施設・福祉施設・交通機関を集積し、住みやすいまちづくりに取り組まれた。

この事業に取り組む際には、再開発事業へ向かっての様々なハードルを越えるため外部委託もされたが、職員のスキームを上げる努力、地権者を含め、地域住民との交渉など数多くの取り組みをおこなわれてこられた。

結果、毎年行われている利用者調査、歩行者調査では目標値を超える良い成果に繋がっておられた。

この計画の当初は近隣商店街の店主によるまちづくりの活性化を計画しておられたが、一部の商店のみが取り組んでおられる状況となっていることは残念に感じられた。

また、旧中心市街は大仙市の中でも地価が高く、市東部地域に住宅街が広がる状況となっている。

・清水保生

大仙市は、平成17年3月に大曲市、神岡町、西仙北町、中仙町、協和町、南外村、仙北町及び太田町の1市6町1村が合併して誕生した。

大曲駅周辺は、秋田県仙北地域の中心都市として発展してきたが、総合病院の老朽化や児童・高齢者福祉施設の不足により中心市街地としての求心力が低下。郊外大型小売店の出店、

中心市街地の大型小売店舗の閉鎖により商業機能全体が低下した。

さらに、市民ニーズの多様化、ライフスタイルの変化により、年間を通した中心市街地の交流施設の利用者数が低迷した。

そこで、地域中核病院の移転など、医療・福祉・健康・交通等の都市機能をまちなかに集約し、交流結節点として賑わいを生み出すとともに、商店街への回遊機会の創出を図った。

地元商店店主らが中心となって設立されたまちづくり会社「ひなび大曲」が、特に女性をターゲットに新たな都市集積から人の流れを商店街に呼び込むため、古い内蔵を商店、交流施設を兼ねるまちなか拠点施設としてリノベーションするなど、新たな顧客獲得の取り組みを進められた。

安来市においても、市役所から安来駅までの中心市街地の活性化を図るうえで、特に女性が集まる賑わいの創出が必要と思われるが、仙台市の取り組みのなかに何かしら参考となるものがあるよう感じた。

3. 秋田県にかほ市 人口 21,476 人、面積 241.13 km²

●視察目的

にかほ市商工会による出前商店街「おらほのふれあいべんり市」の取り組み等について調査研究し、現在安来市でも大きな課題となっている、高齢者の日常の買い物支援対策の参考とするため。

●説明者 にかほ市商工会職員、にかほ出前商店街振興会会长

●説明概要 にかほ市商工会による出前商店街おらほのふれあいべんり市について

にかほ市商工会の会員 24 店舗が、過疎化などにより周辺に商店が無くなり、買い物が不便になった地域を中心に買い物の場を提供している。公共施設等に商店街の各商店が移動出店する形態で、出前商店街「おらほのふれあいべんり市」と銘打ち開催している。

【背景ときっかけ】

過疎化、少子高齢化が進展する中で、市内の各所で高齢者を中心とする買い物困難者が生じることとなり、その支援のためと、事業者の新たなビジネスモデルとして実施することとなった。

【取組の内容】

(1) 出前商店街で取り扱うサービスの内容等

サービス：食料品・衣料品・種苗・雑貨等の販売、包丁研ぎ、廃油回収など

開催時間：午前 10 時～午後 1 時の 3 時間

開催時期：4 月～12 月の期間中月 2 回。年間 14～18 回。

（2）出前商店街の開催当日までの流れ

- ①出前商店街の開催にあたっては、その都度、登録している加盟店の中から出店する店を募集し出店者を決定している。
- ②広報にかほに出前商店街開催を公示とともにチラシを周辺地域に配布、前日には宣伝カーによる広報活動により集客に努めている。

（3）行政との関係

にかほ市から補助金 16 万円（令和 5 年度までは 20 万円）を受けている。

【取組の効果】

- ・買い物の場のほかに、ご近所同士のコミュニティの場も提供している。
- ・開催場所は近隣住民が集まりやすい立地で情報交換の場ともなっている。
- ・買い物に行けない高齢者等に新鮮な野菜などを提供している。

【取組の工夫】

- ・物品販売のほか、食事の場の提供、廃食用油回収による環境改善効果、警察署による高齢者の交通安全・防犯対策の普及啓発等にも取り組んでいる。
- ・令和 6 年度より、空き家コーディネーターの参加により、市の空き家状況の改善に努める活動の一助を目指している。
- ・魚などの生鮮品は保冷設備のある移動販売車により衛生面に対応している。
- ・出店者の協賛賞品が当たる「お楽しみ抽選会」を開催し、集客力向上とイベント性を演出している。
- ・お店のプロが講師となり、生活に役立つ情報を伝える「出前講座」を開催し学ぶ楽しさの場を提供している。
- ・開催告知の方法は、①事前予告チラシを回覧板で周知、②市広報のカレンダーへの記事掲載、③P R チラシを市広報へ折込広告、④開催日前日の広報車巡回、⑤開催日当日の広報車巡回

【今後の展望】

- ・開催頻度を増やすことができないか検討を重ねている。
- ・開催内容をよりお客様に満足いただけるよう検討している。
- ・出店者の売上に貢献する事業の在り方を検討している。
- ・在宅高齢者の減少が顕著である現状を踏まえ、買い物による高齢者の生活能力の維持・向上、意欲向上を図り、施設での開催を増やしていくことを検討している。



●考 察

・作野幸憲

にかほ市商工会では、店舗がなくなった地域の高齢者に、買い物とふれあいを楽しんでもらうことを目的に、出前商店街（おらほのふれあいべんり市）を始められたのが平成22年。今では高齢者にとってなくてはならない存在になっていました。

毎年4月～12月に月2回のペースで、市内の公民館などを転々としながら、メンバーの24事業者のうち10～15くらいの事業者が交代で買い物と交流の場を提供し、成果を上げておられました。

物販店だけではなく、包丁研ぎやマッサージなど出店することで、商店街らしい多様性を出しておられました。また警察も毎回参加され、振り込め詐欺や交通安全の啓発活動を展開しておられました。広報も市報やチラシはもとより、開催日前日と当日宣伝カーを巡回させるなど工夫を凝らしておられました。またチラシの中には協賛店から出された景品が当たる「お楽しみ抽選券」があり、会場で買い物をすればするほど当たる確率が高くなる人気企画などで、参加者を呼び込んでおられました。

効果としては、買い物の場だけではなく、ご近所同士のコミュニティの場、そして情報交換の場になっていることが大きいと思いました。そしてこんなに長く続いている要因は、皆さんが楽しんでやっておられること、また事業者のボランティア精神がとにかく高いことがあると思いました。

安来市でも、市がタクトを振って、買い物困難者に手を差し伸べるこのような取り組みを検討してみてはと思います。

・三島静夫

出前商店として取り組まれておられるので、当然商店が無くなった地域に赴いて活動されるのであるが、大仙市は安来市と異なり、山間地には家族構成が残っており町の中に孤独な方が多く、この出前商店はまちを中心にまわっておられることに驚かされた。

現在24の様々な分野の商店が参加され、通常はその中の15店舗ほどの規模に調整され

出前商店街を開催されておられる。それに付随して毎回警察による安全に関する啓蒙活動を行なわれたり、市職員による空き家相談、医療福祉施設の職員による相談会などを催しておられた。

この出前商店街をおこなうことでどれくらいの売り上げがあるのかとの質問は深く伺わなかつたが、福祉商業の重要性を目的に掲げられ、会員が楽しく取り組める事業の工夫、自分たちのまちは自分たちで守るという強い思いを伺い、この取り組みの素晴らしさに感銘を受けた。

あらためて、「まちづくりは人づくり」であると認識した観察であった。

・清水保生

商工会、なかでもにかほ出前商店街振興会の斎藤会長の尽力が大きいと感じた。

令和6年度の出前商店街開催状況

回	月 日	場 所	出店舗数	来場者数	備 考
1	4/10	琴浦自治会館	15	72	通算 210回
2	4/24	小浜唐ヶ崎自治会館	12	53	
3	5/8	まもめ荘	12	40	
4	5/22	鈴自治会館	12	48	
5	6/5	畠自治会館	12	46	
6	6/19	大竹ふくじゅ館	14	46	
7	7/20	プレステージインターナショナル秋田	9	241	夏祭り
8	9/11	百目木自治会館	13	50	
9	9/24	午の浜温泉	11	43	
10	10/10	小出診療所	12	113	
11	10/23	室沢自治会館	11	66	通算 220回
12	11/8	ディサービスわかば武道島	11	66	
13	11/27	琴浦自治会館	12	69	
14	12/12	午の浜温泉	9	87	
		計	165	1,040	

商工会職員や会員商店のボランティア精神もさることながら、当該事業に対する外部の協力体制が素晴らしい。

にかほ警察署では、毎回職員を派遣し、高齢者の交通安全や振り込め詐欺防止などに関する啓発活動を行っている。

市の市民福祉部生活環境課では、空き家コーディネーターと職員を派遣し、市内の空き家に係る相談を受け付け、空き家情報の収集を促進している。

小出診療所では、所長・研修医・看護師を派遣し、高齢者の疾病予防や健康管理に関する啓発活動を行っている。

市の包括支援センターでは、職員を派遣し、高齢者の介護・介護予防・生活支援サービス等に係る相談の受付を促進している。

超高齢化社会の到来を迎え、高齢者に対する様々な行政サービスが求められる現状において、にかほ市商工会の取組は、安来市においても本当に参考になるものであると実感した。

4. 秋田県能代市 人口 45,236 人、面積 426.95 km²

● 観察目的

能代市が行っているマルヒコビルディングを拠点とした木都再興プロジェクトの取り組みを調査研究し、安来市の賑わい創出事業、中心市街地活性化計画の参考とするため。

● 説明者 能代市企画部移住定住推進課、環境産業部商工労働課職員、合同会社のしろ家守舎代表社員

● 説明概要 木都再興プロジェクト「マルヒコビルディング」について

【ハード事業】能代駅前商店会（秋田県能代市）

- 能代市が、東洋一の「木都」と称されていた時代は、能代駅前商店会も人通りの多さで賑わっていたが、その後、人口減少や後継者不足などから空き店舗が増加し、地域の賑わいが乏しくなった。
- 秋田県や秋田市、市民団体と連携し、若者や子育て世代の支援や創業支援を目的とした複合施設「マルヒコビルディング」を整備し、地域コミュニケーションの促進や空き店舗の再生に挑戦している。

事業実施前

課題

- 中心市街地は人口減少・消費行動の多様化・後継者不足からシャッター化が深刻になった。
- 創業希望者が、出店のノウハウを習得する場や、地域における事業者のネットワークを形成する場がなかった。
- 子育て世代が集まり、地域で寛いで過ごせる場が少なく、若年層の流出が課題になっていた。

申請のきっかけ

- 秋田県や能代市と連携し、空き店舗を活用したシェアオフィス・コワーキングスペースの整備を行ってきたところ。
- 創業や、子育てのコミュニティの拠点となる市民ニーズに対応する複合施設の整備が必要であった。

事業内容

整備した施設の概要

- 複合機能施設の整備
 - 商店街内の旧酒屋を、4つの機能を持つ複合施設「マルヒコビルディング」としてリノベーションした（①事業支援、②子育て支援、③コミュニティ、④創業支援）。
- ITツールの導入
 - マルヒコビルディングへの来訪頻度が自動で蓄積され、来街者の属性を分析することができる、入退館管理システムを導入した。

事業実施にあたっての工夫

- 「マルヒコビルディング」の改修を目的とする住民参加型のワークショップを実施した。住民自らが改修に携わることで、楽しみながら地域への愛着を育んだ。

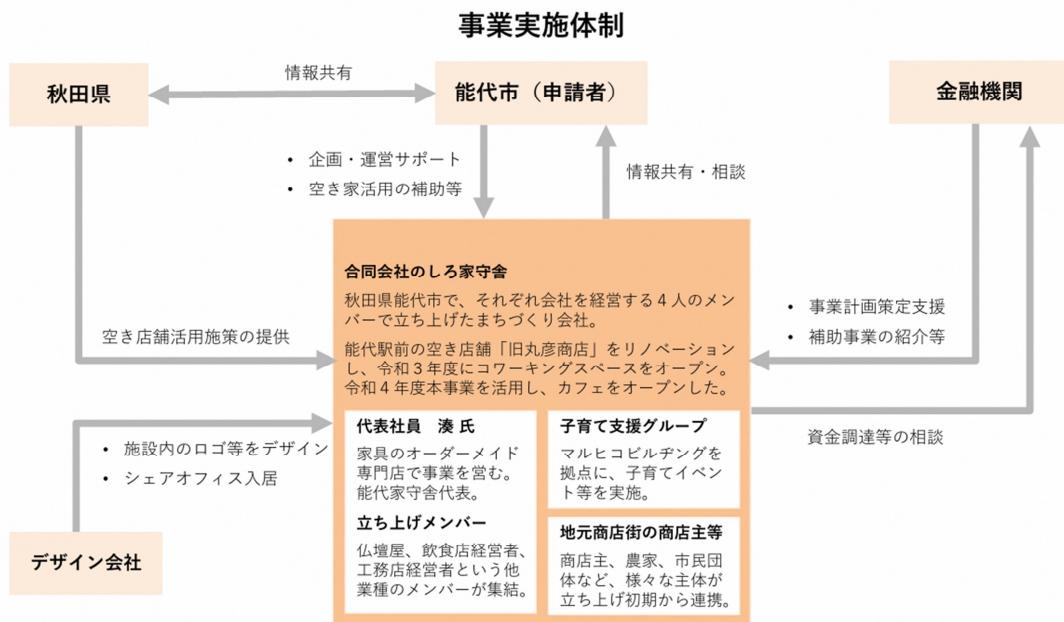
事業終了後

事業の成果

- マルヒコビルディング内に、子供達の遊び場の隣にカフェを併設したことで、子育て世代が寛ぎながら子供を見守れるようになった。
- 間接補助事業者である、のしろ家守舎と、シェアオフィスの入居企業である洋上風力会社が連携し、地域貢献事業を模索しており、新事業の芽が出てきている。
- 地域内外から商店街への関心が高まったことから、設計関係事業者から相談があるなど、商店街で開業したいとの声が増えている。

【ハード事業】能代駅前商店会（能代市）

- 本事業をきっかけに、秋田市、能代市、のしろ家守舎とのコミュニケーションが深まり、施策の情報連携が図られた。また、金融機関やシェアオフィス入居企業からのサポートもあり、行政と民間が力を合わせて、能代駅前エリアの活性化に向けて取り組んでいる。



【ハード事業】能代駅前商店会（能代市）

- 複合施設「マルヒコビルディング」の整備をきっかけに、地域ニーズに対応する機能を商店街全体に展開し、地域コミュニケーションの促進等により商店街の活性化に取り組んだ。
- 今後、継続的にイベントの実施や空き店舗の活用支援等を行い、街全体のテナントミックスに繋げることで、地域に愛着を持つ人を増やす。

関係機関との連携

- 能代市と連携し、本事業に申請した。能代市は、計画作成時から本事業に参画し、創業希望者への講座のサポートや、空き店舗活用の補助事業等を行っている。
- 秋田県とも連携し、秋田県の施策を活用しながら、商店街内の空き店舗を活用した創業支援を進めている。
- 収益性向上のため、金融機関から事業計画について助言を受けている。

地域への波及効果

- 「マルヒコビルディング」整備により、個人事業者や創業希望者等の横の繋がりが形成されたことで、空き店舗活用の相談が増え、空き店舗オーナーと新規起業者とのマッチングに繋がっている。

今後の展望

- 地域住民が、ライフスタイルに合わせた生業をつくるため、「ちいさなシゴトのつくりかた」講座を実施する。能代ビジネスをしている講師から、小さくても収益を上げる手法を学び、新規創業へ繋げる。
- 入退館管理システムと連動して、ボランティア等参加者に対して、商店街内で利用できるポイントを付与することで、地域住民の商店街への来訪を促す。
- 各年代のマルヒコビルディングへの関心度、ニーズのある商品・サービス、購買動機といった取得データを分析する。商店会の来訪者を増やすため、分析結果を踏まえ、子育て世代や若年層を対象とする店舗を増やすとともに、個別店舗とのコラボレーション企画を充実させる。

事業前



旧店舗（丸彦商店）



商店街の様子
(シャッター通り)



マルヒコビルディング整備後

事業終了後



カフェスペース



商店街の空き店舗等を活用したイベント
「のしろいち」の様子



●考 察

・作野幸憲

能代市の駅前商店街は、かつて「東北一のシャッター街」と呼ばれるほど空き店舗が多く、深刻な商店街の衰退が問題となっていました。

そういった理由は①若者の市外流出や人口減少により、買い物客が減少し、②駅前商店街に空き店舗が急増。③そのことによって商店街の活気が失われ、シャッターが閉まったままの店舗が目立つようになったことからそう呼ばれたとのことです。

その現状を打破する取り組みとして、能代市では、地域の若手商業者4人が中心となって「マルヒコプロジェクト」を立ち上げ、商店街の再生に取り組んでおられました。その概要は、おおよそ4つで以下のようなものでした。

- ・ 空き店舗（旧丸彦商店）をリノベーションして「マルヒコビルディング」として再生
- ・ 子どもの遊び場、カフェ、DIY教室、コワーキングスペースなどを設置
- ・ 多世代が集まれる居場所を創出し、地域コミュニティを再構築
- ・ 地元の起業家支援やイベント開催によって、にぎわいを取り戻す試み

この取り組みによって、「東北一のシャッター街」と呼ばれた過去を乗り越えようと、地域住民や行政、民間事業者が連携して一歩ずつ着実にまちづくりを進めておられました。

今回の視察で、このようなやり方のまちづくりや空き店舗活用は大変勉強になりましたので、安来市でも関連施策のひとつとして、取り組んでみる価値はあると思います。

・三島静夫

能代駅近くにある旧酒屋（丸彦商店）をリノベーションし中心市街地の活性化に取り組まれた事業を視察した。

正直、この事業は、説明を受けた能代市職員の堀口誠氏と木工職人の湊哲一氏の二人がおられなかつたらできなかつた事業であり、議員である私たちが市政に提言するには大変難しい内容であった。

堀口氏による商業のための支援補助金制度立案、秋田県との勉強会、人の集まる東京のまちの研究などの取り組み、民間企業との連携の取り組みの説明を受けた中で、私の心にとまつたのは「小さなチャレンジを仮説を立てて続けることの大切さ」であった。

彼らの不屈の取り組みの下支えは何か、伺うことができなかつたことは残念であったが、出来ることならば本市に両氏を招聘して安来市の若い職員に講演をして頂く機会ができることを市に提言していきたい。

・清水保生

東洋一の「木都」と称されていた能代市は当時は能代駅前商店会も人通りの多さで賑わっていたが、その後、人口減少や後継者不足などから空き店舗が増加し、地域の賑わいが乏しくなっていた。

木都再興プロジェクトの拠点である「マルヒコビルディング」は、もともとは丸彦商店という酒屋であった。ここを訪れる前に市内の様子を拝見したが、旧商店街は当時の賑わいはあまり感じられず、寂れた状況であった。

この空き店舗を複合施設として整備したことをきっかけに、地域ニーズに対応する機能を商店街全体に展開し、地域コミュニケーションの促進等により商店街の活性化に取り組まれている。

行政からは、動き出す商店街プロジェクトフォローアップ事業、空き店舗流動化支援事業、地域商業機能複合化推進事業などの支援を受けている。

市の担当職員と合同会社のしろ家守舎代表との連携によるところが大きいと感じた。

幅の広い歩道を活用した、のしろ市大通り歩行者天国の取組は興味深い。若者の視点を取り入れたのしろクローバープロジェクト、木都能代再考・再興・最高。

官民の連携、若い人アイデア、職員のやる気、そして行政の支援、何をやるにしてもこれらが大事であるということを再認識できた視察であった。

以上